
Individual ~ NO,07 **の場合** ~

ミズクラゲ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Individual NO. 07の場合

【Nコード】

N1193P

【作者名】

ミズクラゲ

【あらすじ】

毎日を退屈に過ごしていた白銀 龍也は自身の想像の中の神と会話をしているうちにゲームに参加することになる
主人公のキャラが定まっていなかったので不安定かも

「またなにかしでかすつもりなのか？」

「何もしないよりはマシじゃないか」

「……もしかして俺に言ってる？」

「イーヤソンナコトハナイヨ」

「絶対俺に言っただやがんなお前」

「少々騒がしいぞタツヤ」

「よう、アテネまたなんか始めるつもりなのか？」

「たまには刺激的な出来事がなければな」

「刺激の一言で戦争1つ起こされたらたまんないな」

「そういうな、今度のゲームは面白いぞ」

こいつ等は俺の空想の中の住人

全ての時間と空間を管理する時空王——つまり神の

アテネーマキアとその召使のミカエルだ

「お前の言うゲームはろくなことにならないからな」

「ろくでもない、あるは別にしてお前にはこれをやるう」

「ケータイ？というかこれ俺のケータイじゃん、何を企んでるんだ？」

「面白いゲームを」

「まあいいかどうせ空想だしな……」

20xx/10/6

「ああ……くそつ、ついてねーなDVDプレイヤーのリモコン壊れてやがる」

朝からついてーねーな、でもいつ壊したんだ？

リモコンが真つ二つになるようなことはしてないはずだが

「龍也くん、早く学校行かなきゃ遅刻しちゃうよー」

「あ、はいわかりましたー碧川さん……きつと寝ぼけて壊しちまつたんだな」

「ようゝ龍也ゝおはよう」

「俺はこれからお休みなんだから話しかけんな」

「聞いてくれよゝ昨日の激辛ぱふえ 時間内に食べられなくてよ罰金で逆に一万盗られるし、口がヒリヒリしちまってよ昨日ろくに寝れなかったんだよ」

「お前激辛ぱふえ に挑戦すんのこれで3回目だぜ
いい加減食べきるのは無理だつてきがつけよ
つていうか話しかけんなバカ」

「あれ？三回目だっけ？」

「そうだよおまえゝもう二度と喰わねゝ」とかって言つてたのに忘れんなよ、というか話しかけんなの意味わかんねゝのか？」

「おい、龍也お前の机変色してない？」

「…ホントだ右手んところが変色してんな」

「おいおい、お前寝てるときに涎でも垂らしたのか？」

「そんなわけねゝだろ、これは…なんか腐ってるって感じだな、でも腐ってる割にずいぶん乾いてるな

腐ってるというより風化した感じだな」

「風化してるとかよくわかんない、俺にもよく見して…やっぱわかんねえな、叩けばわかるかもな」

「おい叩いて壊れたらどうすんだよ」

「だいじょーぶ、大丈夫」パンツ

「ほら簡単には」ガシャーン「壊れたな」

「……」

「俺別の席で寝るからこれちゃんと先生に報告しとけよ」

「え？俺一人で行くの？」

「お前が壊したんだから当たり前だろ、じゃおやすみ」

「友情って言葉をお前は知らないのか！」

「お前に渡したケータイはお前の《存在》そのものだ
それを傷つけるということはお前の存在に傷をつけるのと同じでな
もしその《存在》が壊されるようなことがあればお前は《存在》を
失う——つまり《死ぬ》のだ」

「冗談じゃない、こんなものを持っていても利点が無いじゃないか」「利点はある今はまで教えんがな、それと物がよく壊れるそうだな、その理由だけ教えてやろう」

お前の《存在》に私の力を貸し与えた。世間一般がいう超能力というやつだ」

「手から火が出るみたいなの？」

「お前に与えた神力は破砕機手、お前の手で触れたものを分解してしまつ」

「どうすれば分解するのを止められんだよ？」

「自分で考えろ」

[illegible]

「あ、アテネのやろう自分で考えろってなんだよこんな能力いらねーつつうの」

$$20 \times \times / 10 / 24$$

少しだが龍也は能力の制御ができるようになっていた。

「なあなあ知ってる？最近このあたりで通り魔事件が多発してんの」「知らなかったな、ていうかさらっと言ったけどそれ結構重大な事件じゃね？」

「大丈夫だよ、警察がいっぱい見回りしてんだから」

「それだけじゃ安心できないな俺帰るわ」

「お前最近帰るの速いな」

「そんなことねーよ」

そんなことを言っているが龍也は能力使いこなす練習をするために速く帰っていた

俺がいつも能力の練習をする出合頭公園は人が来ることがめつたに無くそこそこ広いので練習をすんのに丁度いい

「あちゃー先客が居たか」

いつも人気が無い公園には小さな先客が居た

背丈からいつて5歳ぐらいだろう

「まあ5歳ぐらいの子には見られてもいいか」

いつものように練習を始める

小石をザ・ハンド《J O J O 参照》が物を消すみたいな感じに分解していくのだ

「ねえ、そのお兄ちゃん」

やべっさすがに5歳児でも素手で石ころ消してるのは変に思ったか？

「一緒に遊ばない？」

「なんだ、遊ぼうか…いいよ何して遊ぶ？」

「ブランコ！！！」

少女は笑いながらブランコに走っていった

「お兄ちゃんはキスしたことある？」

ブランコを漕いでる少女は後ろでブランコを押してる龍也に話しかける。

今までも少女は様々な質問をしていたが、その殆どが恋愛に関することなので、随分とマセてるというのが龍也の抱いた感想だいくら幼くても立派な女性だと認識させられる龍也だった

「あー楽しかった、遊んでくれてありがとねお兄ちゃん」

「せめて、お兄ちゃんにしてくれ。家まで送ってくよ」

「家近くだから大丈夫、じゃーねーお兄ちゃん」

「だからお兄ちゃんぐらいにしてくれ」

そんなツツコを聞く前に少女は走って公園の出口に走って行ってしまった

「元気だな」

…ん？出入り口のところに大きなハット帽コート姿の人物が立っている。この時季からコートとか随分寒がりな人だしかし、いつから居たんだ結構目立つ格好だしすぐにきがと思うのだが……

ふと、さっき文明が話していた話を思い出した

「そういえば知ってる？最近このあたりで通り魔事件が多発してんの」……あいつは通り魔犯だ！

ヤバイ女の子は今アイツのほうに走っていつちまってる

「きみ！はやくにげてええええ」

俺が叫ぶのとほぼ同時に通り魔は懷から青龍刀に似た大きな刃物を取り出す

「やめ」ズシヤ

やめろという間もなく少女は右肩から左腰にかけて叩き切られたほんの一瞬のできごとだった

「……！……？……！……？」理解ができない体が動かない

そして、なにも考えられなかった

「なにをしてるの、速く走らなきゃ死ぬわよ」

急に手を誰かに引っ張られる

「マルタ？」

手を引っ張っているのはマルタⅡアズルⅡサンチェス同じクラスの女子だ

なぜ彼女が居る？

何だ？何が起こってるんだ？公園で女の子と遊んでて——…

！女の子は？

龍也は振り向きそして現状を理解した

「う……あ……うわあああああああ」

「ここに一旦隠れましょ」

龍也とマルタは町外れの廃ビルに隠れた

「・・・何がお前がここに居た?!」

「あなたは他とは違う力を持つてる」

「!・・・なんで知ってるんだ?」

マルタはポケットから携帯電話を出して龍也に見せた

「これには今日起きることが記されているの」

「・・・え?」

「今日一日分の予言ってこと」

「・・・まさか・・・もう一人の神力保持者!!!!」

「その驚き方だと何も知らないのね」

「何も知らないってどういうことなんだ、なんで君は神力を持つてるんだ」

「その説明はあいつを殺してから」

マルタはとんでもないことを淡々というのだったそれも平然な顔で

「お前はバカなのか? 相手は通り魔で、しかも刃物を持ってんだぞ

! 殺すだとかそんなこと言う前に逃げることを考えなきゃ」

「これを見て」

そういつてマルタが見せてきたケータイにはこう書かれていた

龍也、通り魔から逃げようとするが見つかり殺される D E A D

E N D

「逃げようとすれば死ぬわ」

「でも、だからって戦わなくてもいいだろそれになんでさっきからそんな冷静でいれるんだ」

「こうゆう時はパニックになるのが一番危ないの、あなたも冷静になりなさい」

「こんなときに冷静でいれるわけないだろ、人一人死んでるんだぞ

！」

「死んでるんだから余計冷静でなきゃ」

以前マルタは淡々としたままだ

「・・・そうだ！警察だこーゆう時こそ警察だ！」

「電話したらこうなるわ」

またケータイ画面を見せてくる

龍也、警察に電話しようとするが妨害電波によって電話はできない
どころかケータイを落としてしまい見つかる

DEAD END

「なにしたって死ぬんじゃないか！！！」

「あまり大きな声は出さないで、大丈夫戦えば生き残れる確率はあ
るわ」

「確率ってことは絶対じゃないんだろ！」

「でも、0%じゃない」

確かに0%ではないがだからといって通り魔と殺し合いをするだ
なんて並みの思考ではそんな考えにはたどり着かないだろう

「そういえばあなたの神力^{ちから}ってどんなもの？」

「その未来がわかるケータイに書いてないのか？」

「重大な事しか予知できないの」

予知能力も完璧な予知ってわけではないのか・・・

「手で触れたものを分解する能力・・・分解ってより破壊に近いけ
どな」

そういつていつもの様に小石を消してみせる

「もっと大きな物は分解^{こわ}せないの？」

「大きいものは・・・勉強机ぐらいかな」

マルタは少し何かを考えた後こっ切り出した

「じゃあ、あの通り魔の刀を破壊しよう」

「バカか？そんなことできるわけがっ」

「でももうやるしかないの・・・3・・・2・・・1」

ゼロと言うと同時に通り魔が俺たちを発見した

そしてこちらに向かつて走り始めた

「もしかして、見つかるの予知できてたんじゃないのか？」

「わかってたわ、でも今はそんなの気にしてる場合じゃないわよ
あの刀をあなたが消せなかったら2人とも死んでしまうんだから」

——ッ！ この女なんで逃げようとしなんだよ

・・・もしあの刀分解できなかつたら俺の手叩き斬られんだよな、
ぜってー痛いよな

通り魔は俺が今からお前のせいで怪我するかもしれないというの
に刀を振り上げている

おらあつつ！！

振り下ろされた刀と俺の右手がぶつかる
バキ！バキヤツ！！

通り魔の刀が鈍い音を立てて崩れ落ちた

一安心といきたいところだがまだ通り魔の刀を壊しただけそれも先
端のところを少し削った程度なので

一旦距離を置く

「刀は壊せたけど、この後どうすんだよ」

「もう一回隠れましょ」やはり淡々とした口調だ

急に俺が素手で刀を壊したので驚いているのか、動かない通り魔に
背を向けてマルタと俺は廃ビルの奥に逃げ込む

「おい、一旦隠れるとか言ってなんで屋上に来たんだ？」

マルタは隠れると言っておきながらここに直行した、なにか理由が
あるのだろう

「さつきと同じようにどこに隠れてもDEADだからよ」

「俺よく死ぬんだな」

マルタが居なかったらとづくに死んでたな

「気を引き締めてね、これから通り魔は神力を使ってくるはずだから」

「？は」

え？何それ？神力ちからを持つてるとどういことなんだ

「何で神力ちから使えるって知ってるんだ？あ、予知か？」

「予知ではないわ、実は通り魔かれの起こした事件ではありえないようなことがいくつもあるの、私はその事件を調査しているときにあなたが死ぬことを偶然予知してたすけにきたの」

「え？じゃあ俺は偶然助けられたってことか？」

「私の予知は私の身の周りのみだから偶然あなたが近くにいたから予知に掛かったけど、実際は死んでたわ」

「俺の命は」

ザシュツ

階段から刃物を振った音がした

「来たわ」

通り魔はさつきの刀を持って現れた

「・・・ウレシイヨ、今日だケデ二人も保持者を殺セテ」

マスクのせいで声がかなりくぐもってる

「人を殺して何が手に入るってんだよ！」

「・・・何を言ッテル？この世の全テ&ストレスを発散シテ爽快な気分が手にハイルじゃないか」

そう言ッて通り魔は何も無い場所で刀を振る

「なにやってるんだ？」

「何をしてるの龍也！」

「え？」

いつの間にか目の前が歪んで見える

なんだこれ？何なのかよくわからんがとにかくなんかやばいぞ、

しまった避けるの間に合わね

「避けて！」

横からマルタに突き飛ばされた

おかげで歪みに当たらずにすんだ

「あれは一体？」

歪みはそのまま真っ直ぐに進み屋上の手すりを切り落としていった
何を飛ばしてるかはわからんがあれに当たったら肉屋の豚みてーに
真っ二つになるみたいだな

「あいつの能力がなんなのか予知できないのか？」

「私があなたは本当は死ぬところを助けたから未来が変わっちゃった
みたい、画面が磁場嵐みたいになっちゃった。でも、検討はついたら
たわおそらく通り魔^{かれ}が飛ばしてきてるのは空気よ」

「空気？」

ブンッ ブンッ

今度は二個歪みが飛んできた

もし本当に空気だとしたら俺の能力で分解できるはずだ

シューアアアアア

予想通り本当に空気だったようだ。両手で空気に戻すことができた
もしかしたら通り魔^{アイツ}殴るときに能力を使えば腹に致命傷を負わせ
られるかもしれない

刀を振り終えた今がチャンスだ

「うおおおお」

渾身の力を込めて腹を殴る

「う、グオアア」

コートの腹のところが破けとび、腹が分解され血が滲んだ

「これは？」

今殴った感触は女だ、男ではない

マスクを取る

！

「浅黄、先、生？」

よるサバイバルゲームさ」

サバイバルゲームだって・・・

Memory1:END

<<NextMemory/神物保持者10

8衆

シュレクト
破碎機手

主人公・白銀しらがね 龍也たつやの神力ちから

手に触れたものを分解し、消滅させる力

連続で使うことはできず連続使用時間は一分弱

マイ・マイン
予告日記

帰国子女?のマルタニアズルサンチェスの神力ちから

計帯電話に未来の事柄が予告されるが、その日の分だけしか予告されず、予告を知っている者がそれに反した行動を取ると予告が書き換わる等の細かいルールが存在するようだ

ラミネート
凝固気体

龍也の担任であり通り魔犯である浅黄あさぎ 沙良さらの神力ちから

自分から半径15m以内の気体を固めることができる

固められる大きさは最高で2?ほど

刀を振るときに刃として飛ばしたり、足場にしたりできる。結構便利

ゲーム始まりの場合（後書き）

いやあ

文章はやっぱりむずいっす

誤字脱字ありましたら教えてください

説明の場合（前書き）

毎週月曜日に更新していくつもりです

説明の場合

20xx/10/25

どのニュースも通り魔事件関係ばかりだ

俺はその現場に居た

目の前で女の子が切り殺されるのを見た

その切り殺した通り魔が担任だった

このことを考えると頭がおかしそうになる

第一サバイバルゲームって何なんだよ

ブウツウブウツウ

メールか・・・だれからだ

着信 ? アテネ・マキア

白銀 龍也様へ説明会のご招待

■神力保持者の皆様に、今回の「サバイバルゲーム」のご説明をさせて頂く機会を用意いたしました

一、日時 20xx/10/26 0:00

一、場所 いつも会う場所からミカエルが迎えに行きます

皆様ふるってご参加ください。

「・・・・・・アテネ、今度は何を企んでるんだ？」

20xx/10/26 「いつもどおり龍也の創造の中」

「おう来たか龍也、来ないんじゃないかと心配したぞ」

「サバイバルゲームの説明だから来なくちゃわけがわからないままだろ」

「ほれ、龍也こいつに乗れ」

それは人がその上に立つためであろう窪みのある楕円の純白の乗り

「これに乗ればいいんだよね？」

V ^ V ^ V ^ V ^ V ^ V ^ V ^ V ^

ドームの色は乗り物と同じく純白でドームの中には同じ乗り物が沢山浮いており乗り物の上にはどれも人影がある

なぜか姿は黒塗りになっているがおそらく自分と同じくサバイバルゲームの参加者だろう

「今最後の参加者が到着した 早速このサバイバルゲームについて説明をしよう」

「まず最初にだ、神が個々人に渡した物は貴様らの存在となつており、もしも壊されると所有者は存在を失つたことになりこの空間から完全に抹消される、これは前にも話したから貴様らはもう知つているだろう」

神が個々人に渡した存在には一つ一つにその所有者に合った神力、
俗に言う超能力が付属されている、これも貴様らに話したな

ここからが重要だ

その神力を持っている者を神は因果を捻じ曲げこの色板町に108人用意した

貴様らに殺し合いをしてもらい生き残った最後の一人に神の貢献をわたしやるう、ちなみにゲームの参加は既に決定されたものであり棄権などとは一切認めていない」

「殺すいつでもお互いの姿がわかりませんが……？」

「それは個々人の能力を使い推測する」

「つまりゲームは相手の『正体探し』から始まるわけだね」

「バレれば殺される」

「そうだ、正体を突きとめ相手の《存在》を壊すこれがこのゲーム

V V V V V V V V V V V V V V V V

差出人はアテネ、これがルールの詳細だろう

した

20xx/10/26

いた

手に塗るのが義務付けられていた

そのため校門のところに列ができていた

その列の中に龍也はマルタの姿を発見した

「マルタ！お前は昨日の説明会に行ったのか？」

相変わらず表情は硬かった

「それで、お前はこれからどうするつもりなんだ？」

「神の座には興味はないわ、あなたは？」

「俺だつて興味無いよ」

「実は私達は君の座に興味の無い人を集めてるの」

「同盟をつくってるのか？」

「そう、とはいえ私を集めてまだ3人だけだね」

「誰が居るんだ？」

「正体が知れるのは死に直結しているのだからそう簡単に教えるわけにはいかないわ」

「じゃあ俺もその同盟に入れてくれ」

「一昨日の様子を見る限りあなたは人を裏切らなさそうだからいいわよ、さっそく同盟軍の拠点に連れてくわ」

連れて行かれたのはK組（廃棄教室）の教室

「ここが私達の同盟の拠点 さあ、入って」

中はおそらく掃除をしたのだろう、廃教室の割には片付いていた勉強机は教室の後ろに積み上げられており教室のど真ん中に長テーブルがあつた部屋の角はカーテンで区切られている

テーブルに全身皮のコートでガスマスクをつけてる奴と低身長の子がすわってゲームをしていた

「千草、連太郎、新入りを連れてきたわ」

「おおーい、誰かと思つたらタツちゃんじゃない」

ガスマスクなぜか名前を知つていたが初対面のはずだなんて俺の名前を知つてるんだろうか龍也は疑問に思つた

「マルタ、俺はこれ以上仲間が増えるのは反対だっなんかそいつ信用できない！！」低身長が抗議しはじめた

「連太郎、大丈夫だこいつは信用できる」

「・・・え？ 連太郎？女子じゃ随分珍しいな」

「——ッ！俺は男だー！！」

連太郎はそういい残すと走って教室から出て行つた

「あつちやー、連ちゃんを女扱いするのはご法度だよタツくん、俺は君を歓迎するよ」

そういつてガスマスクの千種は飲み物をくれた

「失礼だがなんで俺の名前しつてんだ？」

「やだなークラスメイトじゃないか！教室には居ないけどね」

突然だがJ組は成績不良者および問題児が集められている

「千草、龍也にここのルール教えといて」

「らじやー、龍也！ここのルールだけどまず最初にここのメンバー

が神力保持者だということは他言禁止だぞ」

「この校内に何人の神力保持者がいるんだ？」

「それはわからない、でもこの町には108、いや105人も保持者がいるからね用心に越したことは無いよ。」

あ、ちなみに携帯に残り人数が表示されてるから」

携帯をみる「これが残り人数か・・・」

全員が浅黄先生のように神力を悪用したら大変なことになるだろう
「そういえばお茶菓子があるんだった、おいマルターお茶菓子も
つて来てー」

「・・・・・・」カーテンの向こうからは返事が無い

「マルター？」「・・・・・・」やはり返事が無い

カーテンを開けるとマルタは気を失っている
それどころかさつきまで教室の外がうるさかったのにまるで皆気絶
したかのように静まり返っている

「いきなり、神能力者の仕業かな？」

千種はカーテンの向こうに置いてあるPCを使い校内カメラで校内
の状況を見る

「全員気絶してるね」

『ピンポンパンポン、突然ですがぁーこの学校は占拠させて
もらいましたー』スピーカーから男の声がそう告げたのであった

Memory2:END

<<NextMemory/ 異心伝

心（カトリック）

説明の場合（後書き）

誤字脱字 意味不明な文があったら教えてください

校内放送の場合（前書き）

戦闘シーンなんかは少なめです

校内放送の場合

20XX/10/26

部室のPCから学校の校内カメラをハッキングして校内を見たところどうやら俺たち以外全員気絶してしまっているようだ、そして

『突然ですがあーこの学校は占拠させてもらいましたー』

校内スピーカーからの放送から恐らく神力保持者の誰かが能力を使つて全員を気絶させたのであろう

「千草、揺すつたりしてみたけどマルタ起きない」

「何かの能力だから使用者を直接叩かなきゃ起きないだろうね。起こせないなら今は相手の能力を見極めなきゃ」

「なんの情報もなしにどうやって見極めるつもりだよ」

「大丈夫情報なら今僕の神力で手に入ったから」

「え？いつ神力使ったんだよ？使うような素振りは無かったと思うけど」

「コカビエル」

「は？」

「僕の神力の名前、能力は目で見た物の情報が見える」

「じゃあ俺やマルちゃんみたいに予備動作なしに能力が使えるんだ」

「そうゆうこと、見てみたところこの能力はかなり厄介だよ、集団催眠術とでも言えればいいのかな」

「そんなに厄介なのか？」

「今から全員で殺し合いをしてもらいまーす的なことが使用者の意思で簡単に起こせるんだよ」

「なんて危険な能力だ」

『ハイそれじゃあ今から殺し合いを始めてもらいまーすうつといけね、ついつい殺し合いさせちまうとこだった』

そうじゃなくて今から皆さんはケータイ電話を壊してくださいさあーい』

「ヤバイな早く使用者を倒さなきゃな」

「いちおうマルタからケータイ取つといたよ」

「まずいな連ちゃんはどこにいるかわからないからケータイを壊しちゃうかもしれないな」

今はまだ全員気を失ってるがもしケータイを壊し始めたら学校の保持者が皆死ぬ、それはいいことなのか？ちよつと複雑な気持ちに白銀はなつたのだった

「早く放送室に行こうタツくん！」

「・・・そうか、校内放送使ってるってことは放送室にいるのか！」

同時刻、放送室

「ああー、これで学校の神力保持者一気に殲滅だな」

『おい、まだ油断するなよ。まだ全員お前の能力で洗脳できたかまだ確認しきれてないんだから』

「お前は相変わらず慎重だなあ？98 それに全員俺の能力にかかっているよ、だって俺は皆が必ずしなければいけないことにこの能力を仕込んだんだから」

『まだ必ずねえ、でもその割にはお前のいるまだ放送室に一直線に向かっている奴がまだ2人もいるぜえ』

「大丈夫だよ俺の能力は最強だからな」

廊下（放送室まであと少し）

「どうやらばれずに放送室に行けそうだな」

「いやあ、たぶんそろそろ気がつくよ」

『ええー、皆さん学校じゃあよく言われますよね？廊下を走ると、それなのに廊下を走ってる馬鹿がいまあす

皆さんそいつらをぶっ殺してください』

どうやら千草の言うとおり敵に放送室に向かつてんのがばれたようだ
「走ってるって俺たちのことだよな？」

「僕達で間違いないよ、だってほら」

千種が一般生徒に指をさすと、廊下に倒れていた一般生徒達が目を
覚まし始めた

「なんか様子がおかしくないか？気がついた生徒から生気が一切感
じられないけど・・・」

「気をつけてよタツくん、全員洗脳されてるからさっきの放送どう
り僕たちを襲ってくると思うから」

そこで今から僕の力を少しタツくんにあげるね」

そういつて千種は俺の目に平手を打ち込む

「いつてー、千草何すんだよ」

「タツくん！生徒の頭のところ見てみてなんか見えるでしょ」

痛い目を無理やり開けると洗脳されている生徒の頭から何か出ている

「あれは？」

「あの紐見たいのが切れると洗脳が解けるんだけど僕じゃあの紐に
触ることができないんだよ」

「じゃあなんで俺に見えるようにしたんだよ」

こんなこと喋ってるうちにすっかり周りを囲まれてしまっている

「タツくんの能力ならあの紐を切れると思うんだ」

「もし切れなかったら？」

「僕たちの負けかな？」

一人の生徒がカッターを持って迫ってくる

ここであの紐を切れなきゃ死ぬ・・・なんか前にもこんなことがあ
ったな、と思うと白銀はなぜか冷静になることができた

そして正確に頭の紐だけを能力で千切った

「どうやら成功みたいだよ」

「タツくん放送室方面の生徒の紐だけを速く千切って！

この人数にいつせいに襲われたらひとたまりも無いよ」

「わかってるって」

頭の紐を消して放送室に向かう

放送室

「いやぁ今頃あいつら八つ裂きだろうなあ」

男子生徒、もとい今回の事件をおこした神力保持者は完全に勝ち誇っていた

「?98、今ところ何人死んだあ?」

『勝ち誇つてるとこまだ悪いがまだあいつら死んでないぜというかまださつきよりまだ元気になってお前のいる放送室にまだ向かってる』

「そんな馬鹿な?俺の神力は最強なんだぜい」

「最強なら堂々と自分で戦いに来いよ」

「くっそ もう放送室に来やがったか おい!?98この状況どうにかしろ!.....おい!聞こえねーか?98!」

「やっぱり2人組だったんだ、見捨てられちゃったね」

「.....見捨てられたかぁ、まあいいや俺は一人でもお前等ぐらい倒せるしな」

「お前の神力は自分が触れるか触れた物に触れた奴に紐を付着させてタイミングを見計らって洗脳する、今回はアルコール除菌液に触れておいたんでしょ?」

「え?俺も触れたぜ?」

「タツくんは神力で無意識のうちに分解しちゃったんだと思う」

「へえ、よく見破ったな俺の異心伝心(カトリッカー)の能力をでもお前らもう俺の能力から逃げられないよ、知ってる?アルコールは気化するのが早いのもって」

「突然何言い出すんだこいつ...! この匂いはもしかしてアルコールか!」

「気化したアルコールに触れれば俺の神力の虜のなるぜ」

「・・・千種のおかげでアルコールが気化した位置が丸わかりなんだけど」

そういつて気化したアルコールを避けて目の前の神力保持者を捕まえた

「え？何だよそれ俺の能力は最強なんだぜ？それに避けるなんてありえない！ずるいぞ！ずるいずるいずる」

「うるせーよ」

浅黄先生のとくと同様、神力を使いながらボディーブローを叩き込んでやった

「これで全校生徒はもとに戻るよな？」

「もちろん、それより先にこいつのケータイ破壊しなきゃ」

「壊すのか？」

「こいつは危険だからね、それにやられたらやり返さなきゃ」そういつて千種はケータイを叩き折った

Memory3：END

<<Next Memory/?82の場合

異心伝心（カトリッカー）

保険委員の1年 飴 あめ 分那 ぶんな の能力

もともとゲームに乗り気じゃなかったが？98の口車に乗せられ調子に乗って今回の事件をおこした

恋の場合（前書き）

最近Twitterにはまっています

ミズクラゲ@Chenmirione
よかったらフォローしてください

恋の場合

少し時間を遡り20xx/10/23

通り魔犯浅黄 沙良が神力を使い犯行に及んだ初めての日

その日沙良は他の保持者に遭遇していた

その保持者も自分と同じく神力を使い殺人を犯していた

その手口は浅黄 沙良よりも残虐に行われていた

その後浅黄は白銀にやられ通り魔事件がピツタリと止まったため通り魔殺人犯は浅黄唯一人だと疑うものは一人もいなかった、その為もう一人、女だけを狙った殺人犯が居たのを誰も知らなかった

20xx/10/27

飴 分那が学校を占拠した次の日だ

幸い誰も洗脳されていたという記憶が無く代わりに別の記憶がいれられていた

飴 分那のご両親は警察に搜索願を出したそうだ

ケータイに表示されている人数は105人から104人に減った、まだ後同盟のメンバーを除き100人も神力保持者が居ると思うと嫌気がさす白銀であった

「なあ白銀、昨日超良い事があったんだぜ」

「ふううん」

「・・・いや、聞けよ！」

「え？」

「もつとこうさ、何があったのー？とかどんなことがあったんだ？見たいな感じに少しぐらい興味持つてよ！！てか興味持つて！！」

「随分必死だな、俺以外に話し相手居ないのか？」

「え、いや、やだなあ、あはは俺に友達が居ない？そんなわけないよ、いるよ。うん、いるね、お、おれは人気者なんだから友達ぐらい100人居るからね」

文明はそう言っているのに何故か目から液体が出ている
おそらく自分に嘘をつくのが悲しかったのだと思う

「そうか、じゃあそいつらに話してこいよ 俺興味ないし」

「あ、いや、話ぐらい聞いてくれたって良いだろ！」

「しょうがないな、で良い事ってなんだ？」

「ふふーん、そんなに聞きたいのなら教えてやろつ、あ、嘘です！
帰ろつとしないで！聞いてくださいよー」

「次調子に乗ったら帰るからな」

「えーじゃあ改めまして、そうそれは俺が昨日いつものカフェで激
辛ぱふえ に挑戦している頃だった」

「え、この話もしかして回想に入る？」

「もちろん、というわけで次の # から回想始まるんで」

つて、#って何？と白銀は一応突っ込んだが文明はそんなのを無視
して回想シーンへ

#

20xx/10/26

その日俺はいつもどおりカフェでぱふえを食べていた
めずらしくその日は俺以外に店に客が居た

しかも、同じ色板学園の生徒、制服からして中学3年だ
さらに珍しかったのは俺と同じように激辛ぱふえ を頼んでいたこ
とだ

「きみ、ここ始めて？ 俺以外に激辛ぱふえ を食べてる人見たの
初めてだよ」

「・・・誰です？」

「あ、俺、山吹 文明っていうんだ高1」

「あの有名な山吹さんですか」

「え！俺有名なの！ まいったなー」

「ええかなり有名ですよ、学園馬鹿ルテットで一番の実力の持ち主だって」

「まさか！たしかに学園内の成績不良者、問題児を集めたJ組だからって俺は一番馬鹿じゃないよ」

「そうだったんですか まあどうだっていいですけど」

「そういえば君の名前は？」

「小紅 こへに れいらん 鈴蘭中3です」

「……………」

「どうかしました？」

「いやあ、なんかその喋り方よそよそしくない？」

「初対面ですし当たり前なんじゃ？」

「いや、堅苦しいのは無しにしよう、敬語なんかよりタメ口のほうが楽だし」

「私としてはこの喋り方がデフォルトなんで楽なんですけど……
ていかばふえ来ましたよ」

「だめダメ駄目敬語だとしても相手と距離を置いちゃうもんだ
よ ばふえ 辛っ！！」

「私としては距離を置きたいのですが」

小紅は一瞬悲しそうな顔をみせる

「距離をおきたいなんて悲しいことは言いつこなし」

「……初対面によくそんな接し方できますね」

「はいー 敬語は無しだぜー」

「む……………」

「もしかして、タメ語に慣れてないとか？だったら俺を練習台と思
ってさ気楽に喋ろうや」

「あなたみたいな人初めて会ったわ」

「それ俺が馬鹿って意味？」

「いーえ、え……と、や、山吹？くんよかったらメルアド交換し
かない？」

#

「というわけでメルアドをゲットしたのでしたー」

「回想使ってまで話すことか？それ」

「ふっふっふ、俺にもやっと春が到来したのかな」

あれ？俺の突っ込み無視なのか？というツツコミも文明はこれまたスルーした

「で、だ、俺は27日、つまり今日カフェで待ち合わせる予定になったのだよ」

「あっそう、時間の無駄だったな、俺もう帰るから」

文明の話に俺はなぜかイラッとした龍也は気を紛らわせるために早くK組に行くことにした（文明にはK組に行ってることは内緒にしてある）」

*

「おおーう、タツくん来たか」

相変わらず千種はガスマスク姿で教室でくつろいでる

そして手にはコーラ、一体どうやって飲むのだろうか・・・考えるほどわからない

「そっついやぁマルタは？」

「マルちゃんならあっちで保持者の情報を探してるよ」

「パソコンなんか情報載ってんのか？」

「まああまり有力な情報は期待できないね」

手に持たれたコーラを見ると量が減っている、常に口を隠して食事しているのを見ると千草はどこかの忍なんじゃないかと思う

「そっついえばまだ自己紹介してなかったね」

コップに飲むラー油ラムネを注ぎながら千草がいう

「いや、同じクラスだしやらなくてよくね？」

「いやいや、連ちゃんとは違うクラスだよ」

「連荘？」

「連荘じゃなくて連ちゃんだ、もしかして俺のこと覚えてないかねーよなあ」

K組には自分を除きマルタと千草の2人しかいないと思っていた白銀は謎の声に驚く

声のしたほうを見ると背が低くて気がつかなかったが女子が不機嫌そうな顔をして椅子にふんぞり返っている

だれだっけ？この女子・・・なんか見覚えがあるが思い出せないいや、学ランを着ているから女子ではなくて男子だ

そこでようやく目の前の人物が誰かおもいだす

「連太郎か」

「連太郎かじゃねえよ！お前、今俺のこと思い出したろ！」

自分のことを忘れられて連太郎は怒る

声は未だに声変わりしてないのか女子のような声だ

「2話で初登場にてたった3行にも満たない内に消えた奴の名前なんか覚えてないよ」

「本人の前で堂々とそういうこと言うなよ！第一俺はお前をこの同盟に入るのをまだ認めてないぞ！！」

連太郎は顔を赤くして怒る

「俺一応お前の先輩だぜ？口の利き方考えろよ、第一俺はお前らのリーダーのマルタに誘われてこの同盟に入ったんだからお前の意思は関係ナッシングだよ」

「・・・く・・・う・・・、ともかく俺はお前を認めないからな！」
かなりの嫌われてるようだ

「ねえ、たつくん突然だけどK組に入ってくるとき何でイライラしてたの？」

突然の質問に驚く

「なにいつてんだよ、イライラなんて・・・うん、してないよ」

「嘘ついたってすぐわかるよ、僕的能力忘れた？」

「・・・」

「この目にかければ情報が視えるんだからね」

そういえばそんな能力だったな　なぜか巻末の能力紹介に紹介されてなかったから忘れてた

「いや、それは紹介する場所が無かったからだよ
ていうか裏話はいいから質問に答えてーん」

そうか、考えたことも見えるのか、まずいな

もし、文明が小紅こへに　鈴蘭れいらんとかいう女子とデートに行くことに嫉妬したとかばれたら

「へえ、ブンちゃん小紅ちゃんとデートなんだ」

・・・しまった、と気がついたときにはとき既に遅し

「・・・まずいな」

今日はじめてマルタが喋った

いったい何がまずいのだろうか、話の流れ的には文明が付き合うのがまずいという意味になるが・・・と3人は思いK組内が静まる
「えーと、何がまずいの？」

ようやく、千種が沈黙を破り尋ねる

「文明が付き合うことだよ」

SHIT！くっそ、マルタまで、文明の何がいいんだヨウ

白銀はバカルテットである文明殺害計画を立てることにした

「小紅は神力保持者かもしれん、もしかしたら山吹に被害があるだろうな」

「ちよつと俺文明のところ、カフェに行ってくるよ」

「行かなくても大丈夫だ、私の能力を忘れるな」

マルタは携帯を取り出すどうやら予知を使って文明がカフェにいるか覗る

4：23　カフェにはいる　山吹はいない

4：24　店主に2人がどこに向かったか聞く

4：27 消息が掴めなくなる

「カフェに行っても無駄みたいだな」

「実！（千種の名前） 色板町の監視カメラを侵入^{ハック}できる？」

「勿論」

千種はものすごいスピードでキーボードを叩く

こいつ、もしかやファルコンか？

「はい、できたけど町には監視カメラが100個以上あるんだPC
1個じゃ画面が足りないよ」

「じゃあ画材商店街周辺だけでいい」

「これならなんとか」

PC画面が6分割される

それが2秒単位で別のカメラになつていく

画材商店街周辺にあるカメラは大体14台ほどのようだ

「俺一応カフェの周辺に行ってくるよ」

馬鹿とはいえ友達だ、ディスプレイの前でじっと文明が見つかるのを待つのは俺には無理だった

#

同時刻 なぞの部屋

「・・・・・・う・・・・く、あれ？俺何してんだ」

確かカフェで鈴蘭と待ち合わせして飲み物飲んでたら急に眠くな
って・・・・それで・・・・それで・・・・ん？

ようやく自分の体が言うことを聞かないことに気がつく

いや、厳密に言えば体は動くが椅子に拘束されていて自由に体が動
かない

「なんだこれ？」

椅子に座った状態で拘束されているので椅子全体を見ることはでき
ないが見える限り電気椅子に座っているようだ

ない許さない許さない許さない
ゆううゆうゆるさなああっあいいいい
包丁で傷を抉り始める

「——ッ!!」

声にならない悲鳴を上げる

痛いなんて簡単に超えて別の何かの感触だ

「そっだ！酷い事考えたわ、あなたの周りにいた女子（家畜）を皆殺しちやえばいいのかあ」

鈴蘭は最悪の案を思いついた

おそらくクラスメイト、友人、親族、そして、家族にも今の彼女なら喜んで殺すだろう

「ごめんね、私をもっと速く殺してればよかったのにね」

そっいつて今度は脚を止血し、包帯を巻き始めた

「これ巻き終わったら行ってくるわね、フッフッフ」

完全に最初の鈴蘭の面影が無かった

#

同時刻

「ハア・ハア・どこにも・いねえ」

白銀は商店街周辺を全力で走り回り文明を探したが、見つからない

それは文明の身に何かがあったことを表していた

P L L L L / P L L L L

マルタからの電話、おそらく何かの手がかりを見つけたのだろう

「もしもし、何かわかったのか?!」

「何もわからん、ところでだ何でもいいから山吹の持ち物を持ってないか?」

「・・・たしか、借りてたCDがあつた（借りパク）」

「大至急それを持ってきてくれ、それで文明の場所がわかるぞ!」

#

再びなぞの場所

「いやああ」

つれてこられた少女は壁に立ったまま拘束され悲鳴をあげ、泣き叫んでいる

その顔は見覚えがあつた

（家の隣に住んでる娘だ）

「ねえ見ててよ文明、今からショーが始まるよ」

鈴蘭はわくわく解体ショーなんて言つてポーズをとる

（なんでだよ、何で簡単にこんなこと言えるんだよ）

鈴蘭が包丁を手にとると少女は悲鳴をあげる

「うるさいなあ」

ぐしゃあ

音を立てて少女の手のひらに包丁が刺さる

「い………」

蚊の羽音程度の声で少女は悲鳴をあげた

「次は指を順番に落としていこうかしら……まずは右足からかな？」

「鈴蘭！もうやめてくれ、もう誰にも危害を加えないでくれ！」

しかし、文明の声は鈴蘭には届かなかつた

Memory4:END

<<NextMemory/絆の力マクネティエント

コカビエルちくさみさ

千草 実の神力、目で対象を見ることが情報を入手できる

さらに少しの間なら自分の神力を他の人物に付加できる

ねじれた恋の場合

あれから何時間がたっただろう

目の前で何人も殺された

小紅は未だに自分と同じ歳であろう少女達を拷問のように楽しみ、そして殺している

文明のいる小さな部屋は血のむせ返るような臭いで充満していた

#

「もって…ハア来たぞ、でも…ハア、こんなで文明の居る場所
わかんのかよ？」

白銀は全力で走り回った状態で文明のCDをマルタに渡す

「これなら連太郎の神力で文明の居場所がわかるぞ」

「やつと俺の番か」

連太郎は手をポキポキ鳴らそうとしたがなかった

「ところでさ、タツちゃん足速いね 普通ならここまで一時間はかかるよ タツちゃんは40分」

「いや、今はそんなことより文明の居場所だ、連太郎すぐわかるのか？」

「うるせー！ 今からやるとこだよ 話しかけんなー」

……… 追跡 マークストーカー…！！」

連太郎がCDに触れるとCDがゆっくり空中を滑り出した

「このCDの後を追ってけば所有者、つまりその文明とかって奴の
とこに辿りつくぜ」

「このCDもつと早く動かないのか？」

「うるせー！ どこにいるかわからない場合は時間が掛かるんだよ、
それにこれでも速いほうだよ」

「この速度でかよ」

CDは歩くのと同じくらいの速度で空中を滑っている

普段ならこのくらいの速度でもいいだろうが今は一刻を争う、もう少し速いほうがいい

「速度など関係ない、最終的に文明までたどり着くのなら私の予知が使える」

「どこに文明が居るんだ！」

「色板町の外れの廃ビルだ、ただし私は行けない。行ったらD E A D E N D が出てしまっているのでは」

「わかった！ 待ってるよ文明」

#

「……どうしたの文明？ さっきから黙ってて」

「……」

「どうしたの？ う、うう、うれしくななないの？？」

「……」

「待っててね、文明に憑く悪い虫はぜ、えんぶ殺してあげるから」
鈴蘭がいなくなった死臭の充満する部屋に文明が一人きりになった、
はずがもうひとり人影があった

「どうした？ 文明もう 抵抗する力もないのか？」

「ミカエルか…久しぶりだな」

「4話ぶりだよ、それよりお前はなんで神力を使わん？」

「これでは戦いにならなくて儂は暇になっちゃうよ」

「それなんだけどなんか神力使えないんだよね」

「…もしや文明、お主儂が渡した《存在》を持ってないのか？」

「《存在》って携帯のことか？ それなら今朝充電したつきりだけど…」

「ああもう、《存在》は遠くに在ると神力が弱まるから肌身離さず持つてると言っておいたのに…仕方ないルール違反だがこれも面白くするための、ほれ携帯だ」

ミカエルはポケットから携帯を取り出す

空間軸を無理やり捻じ曲げて文明の家からここに転送したのだ

「さんきゅう、これで絆の力が使える」
マグネティエント

文明が力を込めると今の今まで腕の自由を奪っていた手錠が外れる
「いつ帰ってくるかわからないし早く逃げなきゃな」

文明は小紅に刺され痛む脚をひきずり部屋から出る

コツ コツ

階段を上る音がしてきた

文明は急いで非常口から外に出た

「もう帰ってきちゃったとか困るな」

文明は隠れるところを探す

不幸にもここは町外れの廃墟ビル街、脚を怪我している文明では小紅から逃げ切るのは無理だろう

「…どつかのビルで迎え撃つか……」

#

「いな…い？」

帰ってきた小紅は驚きを隠せない

それもそのはず、手錠によって逃げ出すことができないはずの文明がいないからだ

文明には手錠を無理やりこじ開ける力なんてないはず…
一体どうやって？……

「そうかぁ わかつちゃった 文明 あなたも私と同じ神力保持者だったのね なんてことなのやつぱり私たち相性抜群ね、ねねね。待っててね今からあなたを探すわ」

小紅は廊下から非常口に点々とある血の痕を見て文明を探し始めた

#

文明が監禁されてた廃ビルから少し離れた廃ビルの一室

そこには文明が監禁された始めたのとはほぼ同時に一人の女性がいた

「山吹 文明に続き小紅 鈴蘭もビルから出ました」

「そっか、文明君も神力保持者だったんだ。収獲だね！」

不気味な歌を歌いながら小紅が駐車場にきた

手にはいつもどおり包丁はある

「ねえ、文明。ここにいてるんでしょ?!今出てきてくれたら私殺すのやめるわ、本当はあなたを殺したくないものでも、他の女の手に渡るくらいなら殺すわ

私ね、あなたが私と同じ神力保持者だってわかった時とっても嬉しかったんだ、私ならあなたを一番幸せにできるわだからお願い私を信じて私の目の前に出てきて」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・そつかじゃあしょうがないか

あああなたをくおお殺す!」

小紅が包丁を投げ捨てる、すると

ジャリジャリと鉄と鉄をすり合わせるような音がし始める

その様子を車の陰から隠れて見ていた文明は驚く

「あんなのありか?!」

小紅の体中から柄のついてない包丁が生え出てきていた

しかも全身から余すことなく

銀色の生物と化した小紅は血の痕を追い文明の隠れている車まで激しい金属音を立てて移動する

「そこにいるのねええ」

小紅が手を勢いよく振ると体から生え出ている

包丁が弾丸のように飛び出すしかも何十本も

「そこかああ。そこかああ」

小紅はあつという間に駐車場の車を弾丸（包丁）でスクラップにしまった

「：こんなに早く隠れられなくなるなんて：な」

文明は障害物を全て破壊されてしまったため姿があらわになってしまった、だが表情にはなぜか余裕があつた

「・・・・・・・・」

最早喋るのもやめ小紅は弾丸（包丁）を飛ばす

ガチャイン

! . . . ?

•
?
•
•
•
!
•
L

マグネティエント

「つつくぜ、そしてこれで」

「！！！？！！！？引つ張られ」

「はなれ・ない」

小紅は指一本動かさなくなり磁力で気絶してしまった

とんつ

薄れゆく意識の中で誰かと小紅が会話しているのが聞こえた

Memory5:END

絆の力
マグネティエント

山吹 文明の神力

自分の半径5 Mまでの磁力を操る

その磁力はかなり強力でピストルの弾丸も途中で地面に落とせる
体力的にあまり長時間は使えない

ねじれた恋の場合（後書き）

コメントなんかをもらえるとありがたいです

転校生の場合

20xx/10/31

白銀はその日授業をさぼり（といっても授業内容は全て自習である）校内をブラブラと歩いていた

本来校舎内を授業中に歩くのは教師に遭遇する確率を大幅に上げるので避けたいところだがいつもサボるのに使用していた屋上のもう一段高いところをいいムードのカップルが占領していたため仕方なく校内をぶらついていた

この前の文明誘拐事件が起こってから数日がたった

幸い脚の刺し傷だけだったので後二日で退院できるそうだ

しかし、どこに行こうか今の時間帯K組は誰もいないしな・・・

・いや、誰もいなくてもいいか

白銀は目的地のK組に向かうため周れ右をした

#

教師多発地帯の教員室前を無事通過し、本棟と高校棟を繋ぐ長い廊下に向かう

この学園は本棟から中心として中学棟に高校棟、特別教室棟、そして特別対策棟（別名 学園の孤島 馬鹿の巣窟などなど）がある
特別対策棟にはH、I、JそしてKの四つのクラスがあり
推薦でこの学園に入ってきたものはHかI組、成績不良者
または問題児がJ組になる

つまり、J組はクラスというより謹慎処分などの代わりのようなものなのだ

と長い解説をしていると廊下で見知らない制服の男子が外を見ていた

男子生徒の服装は何の変津もなかったが、手には5×5のルービ

ツクキューブを片手で弄っていた

よく見ると制服の袖のところから大量の針金が顔を覗かせていた
こんな次期に転校生かな？と見ていると不意に目が合った

「この学校の生徒さんだよな？てか生徒だね 見てのとおり転校生なんだけどさ、もしよかつたら職員室に連れてつてくれないかな？」

転校生は困ったアピールで頭をかく

連れて行ってやりたいが今の時間帯に職員室に行くのはゴキブリが喜んでゴキブリホイホイに入るようなものだろう、というわけで転校生には悪いが口だけで説明することにしよう

「この廊下をあつちに渡つたら下の階に行けば職員室に行けるから、悪いけど俺は急いでるんで」

「説明ありがとねー」

転校生はまた片手でルービツクキューブを弄りながら説明したとおり廊下を渡って行った

「・・・針金がちやがちやいっててうるさかったな」

#

「で、なんで同盟メンバーが授業中にもかかわらず全員そろってるんだよ」

「れんちゃんがないよ」

全身をコートとガスマスクで覆った千種がわさびラムネの入ったコップを渡してくる

「前から思ってたんだがラムネとかいつも持ってるけどどうやって飲んでんだ？」

「内緒つてことで」

瞬きをしたら千種のコップが空になっていた

「・・・・・・・・」

マルタは相変わらずパソコンで情報収集をしてるみたいだ。
無口だな

#

「……あゝよく寝たな」

「起きたか、くずやろう」

チビ、もとい連太郎が起きると同時に悪態をついてくる

連太郎がいるということは授業はもう終わったんだな

てか確か俺、お前より2つ年上だよな

「お前もうちよつと口の利き方気に気をつけろよ」

「敬語つてのは敬う人のためにあるんだからお前に使う必要性なんて無いな」

連太郎は敵意むき出しの目で白銀をにらんだ後ゲームを始めた

俺、なんか嫌われるようなことしたか？

・・・・・・・・

コン　　コン

一瞬気まずい雰囲気になりかけたK組のドアを誰かがノックした

しかし、この教室は廃教室。

この教室に用があるものなら普通はノックなどせずに普通にドアを開けて入ってくるはずだ

つまり、ノックした相手はこの教室ではなくこの教室にいる人間に用があるということになる

この教室を使っている人間は全員が神力保持者、つまりノックしたものは神力保持者の確率が高くなる

少し、緊張が走る

「あれ？もしかして誰もいなかった？」

扉を勢い良く開けた奴はこの学校の指定ではない制服をきていたつまり、さっきの転校生である

「あ、また会ったね。さっきは道案内ありがとねー」

一気に全員の緊張がほぐれる

一人を除いて

「……無色いさい 透武とうぶお前ここに何しに来た？」

千草がいつもとは違う口調に、もはや人が変わったように様子が変わる

敵意を向けるためというよりは何かに恐れている自分を隠そうとするための口調

「相変わらず暑苦しそうな格好だね、実みの。」

今日から転校してきたからクラスの下見をしてたんだよ」

無色と呼ばれた転校生がルービックキューブを回すたびに袖のところに見え隠れしている針金が

ガチャ ガチャ と不快音を立てる

「……出てっくれ」

「なんか随分嫌われてんだな、わかったよとりあえず今日は帰るよ・

・あ、そうだ駅においしいお店ができたんだ

？東雲？ってお店だよ 親睦を深めるために明日一緒に皆で食事し

ようね じゃあねー」

無色は不快なガチャガチャという音を立てながら

教室から出ていった

「千種、今の奴は一体知り合いみたいだったけど」

「昔のちよつとね。そしておそらく、いや、確実に神力保持者だよ」

千草は力が抜けたように椅子に座る

「保持者なら同盟に入ればよかったんじゃないか？」

「そんなことしたらすぐさま同盟なんて無くなるよ、とりあえずあいつにだけは関わるなよ」

千草はそういい残すと帰ってしまった

V V

頭の王冠をいじりながらミカエルがアテネーマキアに尋ねる

「何らかの不祥事で8人増えてしまったというわけじゃない」

「そっちの方が予測不可能で面白いだろ」

「動きがあるのは？ 98 ? 66 ? 07だ 全員本来あるはずの

「?07…白銀か マキア、僕はしばらく近くで戦いが見たいんで

「手を貸す出ないぞ」

 $\wedge \vee \wedge \vee \wedge \vee \wedge \vee \wedge \vee \wedge \vee \wedge \vee \wedge \vee$

色板病院375室

「もうすっかりな！かなり元気だぜ」

「そっちは問題なさそうだが精神的にはどうなんだ？」

文明はわざとボケ？をして心配をさせないようにしているが、あきら

かに無理をしている

「目の前であれだけ人が死んでるんだ ショックなのは誰でも一緒だ」

「……今日、来てくれてありがとな」

ガラッ

突然部屋にマルタが入ってきた
かなり急いでる様子だ

「山吹、白銀、急いでここを出るぞっ！」

「どうしたんだよ、マルタ そんなにあわてて」

「たった今予知が変わった小紅がこの病室にもうすぐ来る」

「……嘘だろ」

コン コン

「文明さんの部屋ですかぁー」

ドアの向こうから女の声がした

「早く！窓から飛び降りるぞ」

「え？ちょ」

「今外に連太郎がいる。あいつの能力で下にゆっくり降りれる
それより私にしっかりと捕まってるよ」

マルタと俺たちはすぐに窓から飛び降りた

「入りますよーって……逃げられちゃったか」

小紅は少々残念な表情をした後窓から逃げていく

白銀たち、いや 文明だけを見つめた

「逃げる姿もいいわ 無色さんにもこの気持ち分かるかしら？」

白銀はその言葉が耳に届いていた

#

「絶対昨日小紅は無色さんって言ってたって」

新たに文明がログインしたK組で白銀は昨日聞いた小紅の言葉を皆に伝える

「もしそれが本当ならば昨日来た無色は小紅を助け小紅を配下においてるということになるな」

「小紅は配下になるような性格はしてないぞ」

「監禁されたい体験者の意見だがな もし だ

もし無色が小紅のような奴でさえ配下にすることができるとしたら、これはかなりまずいことになるぞ

小紅のような扱いづらい奴を仲間にするような奴だ

おそらく他にも何人かを配下に同盟を作っている確率が高い。それも私たちのような 戦闘反対同盟じゃなく他の神力保持者を殺すための戦闘賛成同盟をだ」

「無色は必ず同盟を作ってるよ。僕はそう断言できるね」

千草は手紙に眼を落としながら言い切る

ちなみに手紙はどうやら無色からのもので今日の食事の待ち合わせ時間が書いてあった

「もし同盟を作ってるんならその食事ん時に平和条約を結ばばいいじゃん」

「無色は平和条約なんて結ぶような奴じゃないよ

あいつはどちらかというと この食事で僕たちを殺しにかかってくるよ」

「それでもこの食事に行こう なんとか説得してみる

もし応じないんならなんて言わない

必ず説得してみせる」

「・・・よし、白銀もこう言ってることだし食事階に行くとしてよう それで場所はどこだった？」

「色板駅地下4F、クレープ屋？東雲？にあと1時間後」

クレープ屋に誘うのに食事に行こうなんていうなよ

「パフェはあるのか！」

「文明、俺らは戦いに行くんだからな」

しかし、文明にはその言葉は届かなかった

#

というわけで一旦白銀たちは家に帰り私服に着替えてきた

千種はいつものコート姿、文明はまあ普通の私服だった

「マルタ、質問だけどさなんでジャージ姿なの？」

「ジャージ万能説をかける私にその質問は愚問だな」

マルタは上下ジャージ姿しかもオレンジに紫という色合いだ 他人のふりをしてしまいたくなる白銀であった

問題は油 連太郎だ

名前からも分かるとおり男だ

しかし、なぜかスカートしかも容姿が女なので似合ってしまったている

「お前女だったのかー」

なんて、馬鹿な文明は勘違いをしている

「連太郎お前の服装に関しては深く聞かないようにするよ」

「おい、勘違いするな！ 姉に衣服全部女物と入れ替えられたんだよ」

泣きそうな顔で連太郎は抗議をする

その顔はなかなかの破壊力をほこってるぞ

と思っただが白銀は心の奥深くにそっとしまった

「じゃ、まあ行きますか」

色板駅 色板町の唯一の駅

一階から地下5Fまでショッピングできるようになっている
出入り口は西口通路と東口通路の2つがある

俺らは東口から4Fに向かった

#

白銀一行はクレープ？東雲？に到着した

「誰もいないな、もう待ち合わせ時間5分過ぎてんのに」

クレープ？東雲？はシャッターが閉まっており誰も店の前にいなかった

「とりあえず、ここで待つてればいいんじゃないか？」

「時間にルーズなのか？」

「それはおまえらだろう」

向かいの店の壁に立っていた女が話しかけてくる

おんなは腰にいくつもボトルを垂らしさらに手にもボトルをもっている

「5分も遅れてんじゃねえぞ あー？・・・まあいつか」

女は携帯を取り出す

「もしもし、無色？今きたから うん・・・うん・・・わかった またな」

女が携帯たたむと同時に警報音になる

『ただいま原因不明の事故により出入り口が2つとも埋まってしまいました。お客様方はその場で静かに待機してください 繰り返しします』

「さあ舞台は整ったな一方的な殺害バトルを始めようぜ」

女をそういうとペットボトルの水を口に含んだのだった

Memory 6: END

<<Next Memory / ウォーターハザード水没溺水

追跡 マークストーカー！

あひら れんたろっ
油 連太郎の神力

直接触つたものを文字どおり追跡する能力で触れたものがどこにあるのか半径10?以内を三日間まで探知できる
また、所有者も時間にかかるが探せる　ただし10?以内
また触れたものが無機物なら目の届く範囲で好きなところに移動させれる

ディアラフ
恋する少女

こへに
小紅　鈴蘭の神力

体から包丁の金属部分をほぼ無限に出せる
さらにパワーアップしているらしい?

地下デパート水没の場合

地下から地上に行くための2つの通路が原因不明の事故

により《おそらく無色が何かをした》警報がけたたましく鳴り響く

「さあ舞台は整ったな一方的な殺害^{バトル}を始めようぜ」

女をそういうとペットボトルの水を口に含む

「待てよ！関係ない奴らをまきこむつもりなのか！」

白銀は突如の警報で慌ててる非神力保持者（一般人）を指差しながら目の前の女に訴えかける

「こいつらがここにいたのが悪いんだよ

てか誰が巻き込まれようが俺の知ったこっちゃねーんだよ 誰が死のうが私には何の関係もないしね」

女は後ろの壁に手突け白銀を睨む

「関係ないわけないだろ、そんな無責任な事言うなよ！」

「もし誰も巻き込みたくないなんてこと言いやがるんだったらよ何にも抵抗せずに殺されるよ、まあ抵抗しなくても巻き込まれるんだけだな

ところでだけどさ何で俺がずっと壁に触れてるかわかる？

この壁の向こう側ってよ 貯水タンクがあるんだよ

この地下でもしこの壁が崩れて貯水タンクに穴が開いたらどうなると思う？」

女は楽しそうに笑みをうかべる

「やめろ！そんなことした——」

「やめるわけ無いじゃん」

途端壁が崩れ、ダムが決壊したような勢いで水が一気に押し寄せ目も開けられない体も動かせなくなるような衝撃が白銀たちに襲い掛かるその勢いで肺の中の酸素も全て持ってかれた

「——ッ！しゃれにならねえぞ 水つてのはここまで勢いがあるのか?!」

水に襲われ10秒もしないうちにF5の大体が水に沈む

白銀はなんとか体を動かし水面に顔を出す

まだ天井までは水位が達していないため呼吸ができた

とはいえ手を伸ばせば簡単に手がつく

このままだと水面に浮いてる非神力保持者（一般人）は全員水に沈むことになる

白銀は破砕機手シュレクトを使い天井を一部分分解し穴を開ける

破砕機手は使用限度があるとはいえほとんどの物体をバラバラに分解し破壊する神力のため天井程度なら一瞬で穴を開けることができる
服が水を吸ったのと水圧の一撃で体力を奪われていたので上るのに苦戦しつつも上のフロアに（F3）上る

急いで他の場所にも穴を開け非神力保持者（一般人）を助けだす
「あの女はどこだ！」

周りを見渡すが腰にいくつもジュースホルダーをぶら下げているという奇抜なファッションの女がいない

もしやさっきの水流で自滅したのかと一瞬思ったがそんな自滅行為をわざわざするわけが無い

おそらく何かしらの神力を使っているに違いない

そんなことを考えていると

激しい悲鳴人ごみからが聞こえた

「下、すげー洪水じゃん てかとつと逃げねえと」

どこから上の階に上がったのか女は既に上の階に上っていた、しかも衣服のどこにも濡れた後が無いのだ

そして、女の近くには動かなくなった人が倒れていた

激しい出血はしてない

気になるところといえは動かなくなった人たちの体は既に青白くなっていることぐらいだ

相手の神力を必死に判断しようとしてる白銀を見ると女は満足そう

な笑みをうかべる

そして近くの男の腕をつかむ

「皆殺しにしちゃうぜ」

突然腕をつかまれた男は激しい悲鳴をあげそして、5秒としない間に静かになった

周りにいた一般人たちはあまりにも急な出来事を理解できず動けないでいる

「なにをしてるんだ！速く逃げろ！！」

白銀の声でようやく今起きた出来事の理解をできた人たちは一目散に逃げていった

「おう、皆足が速いね、ところでさあんたの仲間はどこに行ったんだ？」

女は何がおかしいのかニヤニヤと笑みをうかべながら水を口にする

「おまえ、あいつらに何した？」

「俺の名前はまゆずみ水連すいむって名前があるお前じゃないよ

てか何をした？って、私は何にもしてねえな」

俺は何もしてない その言葉で白銀は気がついた

「まさか、他にも誰かいるのか？」

白銀は冷静に尋ねる

このゲームに参加したことで白銀は死体などでは大して動じなくなっていた

「さあね、俺は何にも知らないね」

「あくまでシラを切るつもりなんだな」

白銀は戦闘体勢にはいる

後ろで早くもさつき空けた穴から水があふれ出る音がしている、その音は後少しでこのフロアも沈む、戦闘は遅くとも10分ほどで終わらせなければ2人とも水に沈み死ぬという警告音だ

「短期戦か・・・」

意気込む白銀をよそに水連は余裕の表情だ

「あんた、もしかして短期戦に持ち込めると思ってる？だとしたら

そんな考えは捨てることね」

水連は水に手を浸ける

すると水位がみるみると上昇していく、もしこのままの速さで水位が上がっていったら10分どころか1分と持たないだろう

「俺最初に言つたよね、俺は短期戦なんかしたくない。俺がしたいのは一方的な殺害^{バトル}なんだって」

速くも水位は白銀の腰の高さまで上がっており、二人は水の抵抗で思ったように動けない状況だ

だがこれは両方とも同じ条件というわけじゃない、女はおそらく水に関連する能力だろう

でなければわざわざフロアを水浸しにしたりはしない

よって、白銀はいま水連のフィールドにいることになり圧倒的に不利な状況だ

この不利な状況を逆手に取り自分に有利な状況にする方法がないか白銀は考えるのだった

#

水連が自分の名前を名乗ったころマルタと千草はようやく天井に穴を開けF3に上っていた

「いやー、C3爆弾を運よく持ち合わせてなかったら今頃水に沈んでたね」

「なんでC3爆弾なんかを持っていたのか聞きたいところだが今は急いで上の階に行こう、じきにここも水に沈む」

マルタは携帯に書かれている予言を見る

彼女の予言はその日一日の出来事を予告し、その予告どおり、または予告に背くとどうなるかが書き出される

つまり、その日一日とはいえ彼女は完璧に予知できるのだ

しかし、今回や浅黄《一話参照》の時のように他の神力保持者が予知にない（予知にない行動とは他の神力保持者が能力を使う、または予知を見たものが予告されたこととは全く関係の無いことをすること）行動をとるとその日一日の予知が全て書き変わる（ので約1分間使えなくなってしまう（ちなみに浅黄戦では約5分間使えなかった）のだ

「あ、マルタ、ちょっと待っててくれない

コートが水に濡れちゃったせいでろくに身動きがとれなくてね。ちよつと着替えていい？ここ丁度服あるし人もいないし」

マルタは携帯の予告をみて着替える余裕があるのを確認する

「できるだけ、速めに着替えてくれ」

千種は着ていたコートを慣れた手つきで脱いでいく、そしていつも背負っている鞆を床におろし着けているガスマスクも取る

「驚いたな、潔癖症のお前がマスクまで外すとはな」

「体全部あんな汚い水に浸かっちゃったんだからもうマスクしてても意味ないよ、とりあえずあの女にまた会ったらぶつ殺すとするよ」

そう言つて千種は今度は下に来ていたタイツに手をかける 床の穴からは水が溢れ始めていた

「ところでだ、千草。お前の持つ神力は戦闘向きじゃなかったな」

「そうだけど、なんで？」

千種は店にある服を適当に選んで、そのまま着ていく
着た服は一生借りたままにするのだらう

「おそろくだがさっきの女以外に敵はいると思う。もし私が敵だとしたら戦闘向きじゃない奴らを真っ先に襲う、そうすれば楽に倒せるからな、つまり私たちは真っ先に敵に狙われると思うんだ」

マルタはケータイを閉じるとジャージのポケットにしまった

「いるのはわかってる」

水連が急速的に水位を上げ始めてころ

すでに水没したF4、連太郎と山吹はF3に居たが未だにこのF4にいると言ってもいい

2人は関係者以外立ち入り禁止の部屋にいた

幸か不幸かこの場所が入ってからひとつ上の階に上がるようになっていたため上の階には水が入ってこない

だが出入り口は上の階には付いていない

もしここから出るのなら水没した下の階に降りなければならないのだ

「・・・どうしよう、（同盟の）皆は無事かな？」

いつも白銀に向ける態度とは一変し、弱気な態度に連太郎はなっている。上着は水を吸ってしまい重いし体温も奪うし、ということ
で干している

「大丈夫だつて、それよりスカートはいてるから女かと思ってたけどお前女なのな」

「まだ女だと思ってた！待ち合わせ場所で姉に無理やり着せられたつて言っただじゃないですか！」

「そんなことよりもう一回将棋版やろうぜ」

なぜこの人はこんなに気楽で入れるんだ？そしてなんで俺に一度も勝てないのに楽しそうに盤ゲーム誘ってくるんだ
もうやりたくないんだけど

そんな事を思いながらも連太郎は暇なので山吹と盤ゲームをするのだった

「はい 先輩 詰みです これで35勝0敗です」

また負けたー

山吹は悔しそうな声をあげた

白銀が敵と戦っているというのに2人はなんだかんだで盤ゲームに

熱中していた

<<Next Memory/水と恐怖

Memory...END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1193p/>

Individual ~ NO,07の場合 ~

2010年12月10日01時35分発行